

日本記者クラブ会報

第401号
2003年
(平成15年)
7月10日発行

〒100-0001
東京都千代田区内幸町二ノ二
日本プレスセンタービル
©社団法人 日本記者クラブ

メガワテイ大統領が会見

施設運営委員長に岡元氏(TBS)

さえない三連敗の出だしで、企画委員会にも、委員のみなさんにもおわびをしなければならぬな、と一時は覚悟しました。

このページは前月の報告が主です。六月のことです。まず中国が初参加したエビアン・サミットが一日と三日。小泉首相をこの前後に招くべく、政治担当の企画委員の方にも動いてもらいました。が、空振り。実は首相の会見は、ことしの一月十七日に一度は内定し、延期になっていました。総理には年に一回は、ナショナル・プレスクラブで会見することを慣例にしてもらいたいです。

次は国賓ゲストの話。韓国の盧

武鉉大統領は六日と九日、インドネシアのメガワテイ大統領は二十日と二十五日の訪日でした。

昨年末、大統領選が終わった段階で、北朝鮮問題での日韓連携ということから、〇三年のメダマは韓国大統領と思っていました。二月二十五日の大統領就任式に、理事長名でお祝いのメッセージを送り、公式訪問の際には日本記者クラブで会見をお願いしたいと思し添えました。その後も在京大使館の関係者と接触を続け、当クラブでの会見の意義などをくわしく説明しました。訪日が報じられると、正式の招待状を、駐日韓国大使経由で青瓦台へ届けました。

が、結果は新聞、テレビ各一社の単独会見、民放のタウンミーティング形式番組への出演、迎賓館での首脳会談後の共同会見、そして国会演説。大統領側近の意欲的などうか、腰のさだまらないメディア対応で、玉砕でした。

メガワテイ大統領も、在京大使館情報では当初「東京では会見せず」。同行する閣僚の一人が会見に応じるかもしれない、という回答でしたので、ほぼ完全にあきらめていたのです。それでもと一縷のぞみをつなぎ、北村理事長の力も借りて粘りました。外務省の小田野儀典長などの先方への説得もあって、急転、二十三日午後の会見となりました。

当日、司会をした宇治企画委員長が会場で紹介したように、メガワテイ大統領が二百人からの内外プレスを前に、会見に応じたのはこれが初めてだったようです。そ

のまま読むとそれだけで会見時間を超過する原稿を、こちらの求めに応じ半分にしての冒頭発言、そして質疑応答でした。国賓の久々のワンチャンス会見とあって、質問は全員第一線の記者。とりあえずはホッとしました。

クラブ賞内規を改定

三十日の理事会は、西日本新聞、テレビ東京の理事交代(七ページ)を承認。テレビ東京の田村哲夫理事の退任に伴い、後任の施設運営委員長をTBSの岡元隆治理事に委嘱しました。

クラブ賞内規の一部改定も決まりました。選考委員会での表決方法のほか、副賞の五十万円を「白金記念メダル」に改めました。受賞者の方からも、現金よりずつと手元に残るものがないのではなにか、という声の前からありました。複数受賞者への対応という意味もあります。

同日、全く突然、昼食会に出席した三好崇一会員が午後三時二十分急逝。言葉を失いました。合掌。

(専務理事 岩崎玄道)

第16期(二〇〇三年度)委員会(◎印委員長(役職は六月末現在))

総務委員会

◎門田 衛士 共同通信社専務理事・編集総本部長

滝鼻 卓雄 読売新聞社東京本社取締役副社長・編集主幹

島田 昌幸 日本経済新聞社常務取締役本部担当

住田 良能 産経新聞社専務取締役・総括・主筆

宇治 敏彦 中日新聞社常務取締役・東京本社代表

関根 昭義 日本放送協会専務理事・放送総局長

岡元 隆治 東京放送報道局長

大戸 宏 フジテレビジョン常務取締役

村上 重美 日本新聞協会専務理事

玉川 寿夫 日本民間放送連盟専務理事兼事務局局長

北村 正任 理事長兼毎日新聞社常務取締役主筆・総合メディア担当

君和田正夫 副理事長兼朝日新聞社代表取締役専務・編集担当

小林 昂 同日本テレビ放送網上席執行役員・ピーエス日本代表取締役社長

岩崎 玄道 日本記者クラブ専務理事兼事務局局長

会員資格委員会

◎滝鼻 卓雄 朝日新聞社編集局長補佐兼経済部長

神徳 英雄 毎日新聞社論説副委員長

瀬戸 純一 読売新聞社編集局長

佐藤三千男 日本経済新聞社東京本社編集局長

岡崎 守恭 共同通信社編集局長

塚越 敏彦 日本放送協会報道局編集主幹

堂元 光 東京放送報道局取材センター長

田中 龍男 フジテレビジョン報道局役員待遇解説委員長

船田 宗男 日本新聞協会事務局局長

深澤 亘 日本民間放送連盟事務局次長兼会長室長

工藤俊一郎 日本新聞協会専務理事

企画委員会

◎宇治 敏彦 朝日新聞社論説副主幹

村松 泰雄 朝日新聞社編集局長補佐

津山 昭英 毎日新聞社編集局長

伊藤 芳明 毎日新聞社政治部長

山田 孝男 毎日新聞社政治部長

橋本 五郎 読売新聞社編集委員

中井 康朗 読売新聞社論説委員

永野 健二 日本経済新聞社東京本社編集局長

小池 洋次 日本経済新聞社東京本社編集局長兼英文編集部

宮田 一雄 産経新聞社東京本社編集局長

矢島 誠司 産経新聞社論説委員

春名 幹男 共同通信社論説副委員長

金重 紘 時事通信社監査役

菅沼 堅吾 中日新聞社東京本社編集局長

影山日出夫 日本放送協会解説委員室解説主幹

飯野奈津子 日本放送協会解説委員室解説委員

羽生 健二 東京放送報道局編集主幹兼解説室長

川戸 恵子 東京放送報道局取材センター部長兼解説室解説委員

矢水 啓助 日本テレビ放送網広報局広報部長

渡辺興一郎 全国朝日放送報道局次長兼報道企画部長

和田 圭 フジテレビジョン報道局解説委員

熊村 剛幸 テレビ東京取締役報道局・スポーツ局担当

鳥居 元吉 日本新聞協会編集制作部長

村澤 繁夫 日本民間放送連盟番組部長

リント・シーク ロイタージャパン特派員

ヴァーランド・ワーグナー シュペー

重村 智計 個人会員(毎日新聞出身)

中村 靖彦 (NHK出身)

長沢 光男 (朝日新聞出身)

会報委員会

◎住田 良能 日本テレビ放送網報道局長

元田 成 経済部長

仙石 伸也 日本新聞協会広報担当主筆

永井多恵子 個人会員(NHK出身)

中園 龍二 (読売新聞出身)

橋場 義之 (毎日新聞出身)

福沢 亜夫 (時事通信出身)

施設運営委員会

◎岡元 隆治 日本経済新聞社総務局次長兼総務部長

柴田 仁 日本放送協会報道局総務部長

冷水 仁彦 全国朝日放送報道情報局映像センター長

岡井哲太郎 日本新聞協会日本新聞教育文化財団事務局長

今田 昭 日本プレスセンター常勤監査役

田村 進 個人会員(産経新聞出身)

阿部 穆 (共同通信出身)

古野 雅美 (共同通信出身)

北城 恪太郎 経済同友会代表幹事

▼タフで実践的な構造改革論

経済三団体首脳の中で、一回り若い五十歳代の代表幹事の誕生である。言葉にメリハリがあり、勢いがある。最後まで原稿に頼らず、自分の言葉で対応した。

「新事業を創造したい。すでに存在する企業にも新しい事業に取り組んでほしい」と力説した。同友会副代表幹事の時からベンチャー一起こしに汗を流してきた。「十年前はコンピュータ機器の販売が七〇%を占め、利用技術や保守などのサービスは三〇%だった。

しかし成長分野であるサービスに力を入れた結果、サービス七〇%、コンピュータ機器三〇%に逆転し、黒字体質の基礎を作った」と代表就任であいさつした。



6.4 (水) 昼食会
司会 君和田正夫副理事長
内山敏夫委員
出席 92人

橋本 修二 藤田保健衛生大学教授



6.12 (木) 研究会
「HIVエイズ」13
司会 富田雄委員
出席 38人

▼危機感こそが拡大防ぐ

「この予測は当たってはしくない」。日本人のエイズウイルス(HIV)感染者とエイズ患者は、二〇〇六年末には計二万七千人に達し、〇一年末から五年間で二倍以上に急増する、という近未来予測をまとめた橋本教授は、自分の予測が外れてほしいと願う。

〇一年までに厚生労働省に報告されたHIV感染者と患者の累計(血液製剤による感染を除く)は四千五百六十九人。しかし、未報告の感染者の実態は不明だ。

橋本教授らの厚生省研究班は、患者のうち発病して初めて感染が分かったケースの割合などから、感染者総数を試算。〇一年末で実際の感染者は一万七百八十人、患者千七百六十人と推計した。

現在の日本では異性間接触による男性の感染や、同性間での感染が多く、このままの割合で増加が続けば五年で感染者は二・一倍、患者が二・九倍になる計算だ。

米国の患者・感染者推計約九十九万人などと比べ、日本は少なく思えるが、「欧米では一九九〇年代後半から患者の年度報告数は減っている。先進工業国で増加しているのは日本だけ」と指摘。しかも急増傾向なのが問題と分析した。

自覚していない感染者の把握などの対策が求められるが、拡大を防ぐために最も重要なのは「危機感」という。「当事者に危機感がなければ、どんな対策も効果は期待できない」と語った。

日本のエイズへの対応は、報道も含めて「のど元過ぎれば」の典型に見える。「エイズ対策の失われた十年」という悪夢だけは避けねばならない。

共同通信編集委員

森平 暁

ガースナー会長による米IBM本社再建のヒントにもなったこの事業転換の過程で、様々な新事業が育ち、社員が新しい技術を身につけて職場転換した。自らの成功体験に基づくだけに説得力はある。中学時代の恩師に英語の成績を良くしてほしいと言われたことに奮起してがむしゃらに勉強。IBM入社後も、上司に直談判して社内ビジネスルールを変え、従来ならむりな商談を成約させたというチャレンジ精神の持ち主だ。

「構造改革では、時間がかかる」と疲れるだけだ。経営者は早く成果が出ている部分を見つけては適だ。「小泉改革は方向としては適切だが、スピードは不十分。点数は外交八〇点、経済五〇点、全体では七〇点。社員はほめると一生懸命やる。ほめる方が成果が上がる」と、構造改革を指南した。

タフで実践的な構造改革論に、さわやかな余韻が残った。

日本経済新聞編集委員

長谷川洋三

倉田 秀也 杏林大学総合政策学部助教



6.20 (金) 研究会
「北朝鮮」⑧
司会 重村智計委員
出席 78人

▼北朝鮮問題への学問的取り組み

会場は、学問的な分析と取り組みにただただ圧倒された。朝鮮問題に取り組む日本の学者の中で、学問的に問題を整理して説明できる研究者は極めて少ない。独自の理論や学説は、ほとんど書かれな

い。多くが、新聞記事の切り抜きか、新聞記者まがいの情報を根拠に論理を展開する。はなはだしい場合には、根拠も示さず小説を書くように「自説」を展開する研究者もいる。だから、見通しや予測がしばしばはずれる。見通しや判断を誤っても、新聞やテレビが責任を問わずに使うから、マスコミを甘く見て、「間違えてもかまわない」と高をくくっている節がある。メディアも、相当に見くびられたものである。

朝鮮問題では、しばしば「小説」ともいふべき、根拠も取材もない「分析」がもつともらしく語られる。そうした中で、倉田秀也助教は、学問的な取り組みと手法では高く評価されている。英語の文献も十分に読み込み、理論的アプローチができる、数少ない学者の一人である。

倉田助教は、クリントン政権以来のアメリカの北朝鮮政策の変化を、明快に分析してみた。米国の北朝鮮政策における「消極的安全保障」や、「先制攻撃論」を簡潔に説明した。

また、悪化する米韓関係を「逆機能」と「再調整」というキーワードで分析した。さらに、北朝鮮の核問題解決のモデルとして、ウクライナが非核化を実現したケースが参考になると提言した。また、九九年九月の米朝ベルリン合意の教訓を生かす方向を示した。久しぶりに、知的興奮に満たされた研究会になったのではないだろうか。

重村 智計

メガワティ・スカルノプトリ インドネシア大統領

▼指導者としての静かな自信

「この場でお話するのは日本国民の皆さまとお話するのは同じ意味があります。世界の国々の人々に話すことにもなります」。インドネシアのメガワティ・スカルノプトリ大統領は冒頭スピーチをこんな調子で切り出した。

メージを払しょくしようと、同国政府が記者会見を設定した。大統領は清水の舞台から飛び降りるほどの気持ちだったのだろう。

同行記者団の間では、会見で大統領はスピーチをするだけとの見方が強かった。現に大統領は冒頭スピーチの結びで「詳細は担当大臣がお答えします」と述べていた。

記者会見なのだから、この発言は言わずもがなに聞こえる。だが、二年前の就任以降、旗印だったKKN（汚職、癒着、ネポティズム）の撲滅が進まず、高まる国民の批判を浴びてプレスを敬遠していた大統領である。

最も重要な友好国である日本訪問を機会に、閉鎖的な大統領のイ

ところが、大統領は質疑応答に移ると、自ら言葉を確認しながらゆっくりと答え始めた。インドネシアで報道の自由化が進んでいることを強調するなど、報道陣そのものを多分に意識したエールを送り、まずは雰囲気作りからスタート。

汚職や癒着の撲滅が進んでない現状については「近代的で民主化が進んだ日本でさえもこの問題はまだ解決してない」と日本を引き合いに、民主化推進には時間がかかることを説明した。

国際的な関心が集まるアチェ問題については、現在進めている武装独立派に対する軍事作戦が憲法





6.26 (木) 囲心会
司会 重村智計委員
出席 57人

▼大胆な「日韓同語源説」を展開
「日本語の語源は古代韓国語である」。韓国作家李寧熙さんによるこの大胆な仮説が、講演「裸の日本語―美の原点に迫る」で披露された。流ちょうな日本語で

堂々と話す李さんの様子に、次第に引き込まれていく参加者も多かった。
李さんが日韓両国の比較文化史に関心を持ち、研究を始めたのは三十年前だという。以後、日本で著書『もう一つの万葉集』などを出版、そのユニークな持論は大きな反響を呼んだ。さらに研究を進めた最近では、古代韓国語がどのような日本語に変わるかを分析した「李寧熙の十二の変転法則」を発表するなど、盛んな探究心はと

李寧熙 (イ・ヨンヒ) 作家

上も妥当で国会の支持も得ていることを強調した。来年の大統領選挙についても、間接的ながら出馬の意欲を強く示唆するなど、国家指導者としての自信を示した。
結局、大統領は記者から出された五つの質問の三問に自ら答えた。会見にはドロジャトン・クンチヨロジャクテイ経済担当調整相ら六閣僚が同席したものの、手持ちぶさたの様子だった。
日本記者クラブでのインドネシア大統領の記者会見は一九九九年

十一月のワヒド大統領の会見に続いて二回目。話し好き、記者好きのワヒド大統領と比較されるのは、と会見の成り行きを心配していた在京インドネシア大使館もほっとした表情だった。「国内でもこの調子で会見をすればいいのに」とは同行記者の感想だった。
日本経済新聞アジア部編集委員
小牧 利寿
6・23 (月) 記者会見 司会 宇治敏彦企画委員長 通訳 パンバシ
和光大学助教授 出席 199人



6.30 (月) 昼食会
司会 川戸恵子委員
和田圭委員
出席 84人

石 弘光 政府税制調査会会長

どまるところを知らないようだ。「すでに二千単語をこの法則で追求した」という李さんは、変転したという言葉の例を次々挙げていく。例えば「さち」は古代韓国語では「鉄器」を意味するが、日本で「幸」に変転したという。「鉄器」という物もたらず幸せということ。実用的な韓国語が、なぜか日本に來ると抽象的で詩的な言葉に変化することが多いのです。日本の美しい風土の影響でしょう」。

「説」に異を唱えられることも多いと言いが、新聞記者や国会議員の経験もある李さんは、スピーチ後、どんな質問が飛んできても、常にユーモアたっぷりに余裕の笑顔で答えていた。「両国が仲良くするためにには、お互いの国の言葉を学ぶのが一番。そのために語源を知っているのと、勉強しやすいのではないかと思います」と、さわやかに語り、会見を締めくくった。
時事通信文化部
沖永利志子

▼財政の屋台骨支える決意
消費税率の二けたへの引き上げを初めて明記するなど、六月十七日に小泉首相に提出された政府税制調査会の中期答申は、増税色の

強い内容となった。石会長は、「少子高齢社会では、国民が広く税を負担しなければ、社会保障をはじめとする財政需要を賄えない」と熱弁し、国家財政の屋台骨を支える政府税調の強い決意を示した。
石会長は公的年金の保険料や給付への課税について、「年金は入り口（払い込み）が社会保険料控除で一〇〇%非課税のうえ、出口（給付段階）でも公的年金等控除で実質非課税だ。そういうのは日

ク ラ ブ ゲ ス ト



6.30 (月) 研究会
「米外交の行方」①
小池洋次委員
出席 145人

本だけだ」と強調した。相続税についても、「死亡者百人につき五人弱しか税を納めていない」と問題を指摘した。消費税率は、小泉首相が首相在任中の引き上げを否定しているが、「国民は税負担を渋々でも受け入れざるを得ない」と思っている。国民合意は簡単に得られないが、「(首相の)任期の三年間で国民合意を得てもらおう」と、引き上げは必要でありかつ可能だ、との考えを示した。

久保 文明 東京大学大学院法学政治学研究科教授

▼レーガン主義の浸透
9・11テロ以降の米国は圧倒的な軍事力を駆使して、敵対的ともいわれる国や勢力に容赦ない攻撃を加え続けるのだろうか。大統領選

考えると税収は望めない。将来的に各国で法人税の引き下げが起これば、日本は下げざるを得ない」と述べたが、これもあくまで、「二三年待ち、その先」だ。
答申には、「増税を国民に訴えて議論を巻き起こす狙いがあった」という。ただ、一方で「高度成長期の税調会長をやったかった。毎年、毎年、減税をやった正義の味方みただった」とも述べ、デフレ経済下の税調会長としての苦しい胸中ものぞかせた。
読売新聞経済部

舟楫 格致

挙を来年に控えて米外交の行方を見極めようとするシリーズ研究会の第一回は、東大大学院の久保教授を講師に迎えて「米政治の潮流」をテーマに取り上げた。

久保教授は大統領の個人的な資質や、いわゆるネオコン一派の影響力以上に、ブッシュ政権を特徴づけているのは「レーガン主義の浸透」だとみる。もともとレーガン政権は、軍事・経済力の重視と併せ

て反共モラリズムを原動力としたが、政権を担う保守派の人材・政治基盤は十分に育っていなかった。むしろその後には議会共和党内で中道穏健派が衰退する一方、保守派主流の同党が九四年中間選挙で上下両院の多数を占める。その過程でチェイニー現副大統領ら保守派の人材が輩出、現政権を固めるに至ったとの分析だ。

同教授はさらに、ブッシュ大統領の政策優先順位は二にも二にも9・11の再現を防ぐことにあるとし、この危機意識の濃淡がEU主要国はじめ他国との対応の差を生んでいるとみる。もともと対イラク戦争は種々の条件が重なった極めて特殊な例であり、北朝鮮に対しては徹底的な査察の実施など、一方的な要求を外交手段によって押し付けていくとの見方だ。

イラクの戦後処理の成否、景気の動向次第で、大統領選挙は必ずしも現職再選とはいえない、というのが同教授の見立てだが、そうであればなおのこと米外交の新たな展開を注視しなければなるまい。

朝日新聞出身 内藤 頼誼



● 囲碁の会○
安田会員が優勝

恒例の夏季大会が六月二十一日(土)に開催され、安田志郎会員(読売新聞出身)が優勝しました。安田さんはこの日が誕生日。二重のお祝いにひととき大きな拍手が送られました。

当日の参加者は三十八人。ひと四局でポイント計算をするスイス方式で行い、安田さんと庭野静雄さん(読売新聞出身)が四戦全勝。わずか一ポイント差で安田さんに栄冠が輝きました。

主な順位は次の通りです。①安田志郎②庭野静雄③畠山武(以下三勝一敗)④後藤光祥⑤相川誠一⑥出田裕⑦有賀忍⑧佐伯晋⑨山根耕志、下村澄。

なお、今月からコミを「六日半」に変更しました。次回は七月十九日(土)、紅友会との対抗戦です。

イヌイットの人々はモンゴロイドだけであつて、我々日本人と容貌や風俗にも通じるものが多いのだが、この映画のもとになつていくというイヌイットの伝承には、古事記の神代編を彷彿とさせるものがあった。両側に分けて垂らす髪型や衣服にも、日本の神代の時代の趣が感じられる。制作関係者も俳優たちもすべて、イヌイットの人たちだというのが、伝承の積み重ねの中に、人間を鋭くとらえる目があった。

物語は、氷原に生きる小さな集落で起きた、恋をめぐる男の争い、男女の愛憎、殺人、逃亡、生存、復讐、和解、平安、秩序という形で展開するが、そこには、生活の舞台と衣服などを改めれば、現代の文明社会で、日々起きていくことと変わらないものがある。人間が何千年もの間、



繰り返してきた生活の営みと心の葛藤、モラルの原点を、氷原という厳しい環境の中で描いたところに、心に響く迫力があつた。

中でも、寝込みを槍で襲われた主人公が、果てしなく続く、

氷と水の中を、全裸で逃げるシーンや、長い逃亡の後、集落に戻つて妻と抱擁する姿は鮮烈で、日本や欧米の映画では、なかなか描ききれない素朴な迫真力があつた。

ただ、映画としては、シンプルながらストーリーで三時間はあまりにも長い。粗削りの良さを買う意見もあるだろうが、もう少し整理して、物語をわかりやすくしていれば、引き締まった作品になつたと思える。

試写会

氷海の伝説

(個人会員 NHK出身) 三木 友直

会議報告

第243回会報委員会

(6・9 シルバールーム)

七月号の編集方針を協議した。

出席 住田委員長、仙石、中園、橋場、福沢、元田の各委員。

第310回会員資格委員会

(6・19 シルバールーム)

七月一日付の会員入退会を審議し、理事会に答申した。

出席 滝鼻委員長、瀬戸、佐藤、岡崎、塚越、田中、深澤の各委員。

第322回企画委員会

(6・26 宴会場)

ゲスト選考について協議したほか、八月末に行う「第六回記者研修会」と九月に予定される「自民党総裁選討論会」にむけて担当幹事を決めた。

出席 宇治委員長、山田、橋本、中井、小池、矢島、菅沼、影山、飯野、羽生、川戸、矢永、和田、熊村、鳥居、村澤、長沢、ワグナーの各委員。

第382回理事会

(6・30 大会議室)

①役員の一部交代(別掲)を承認した②理事交代で退任した田村哲夫氏が務めていた施設運営委員長を、岡元隆治理事(TBS)に委嘱する

ことを了承した③日本記者クラブ賞の「内規」の一部改定を了承した。

改定箇所(1)賞の内容 賞状とプラチナ製記念メダル(旧・賞状のほか副賞五十万円と特製万年筆)

(2) 参考資料のビデオ・録音テープ 代表的なもの、本と候補者の仕事を説明するビデオテープ二十分以内も添付可能(旧・代表的なもの一本のみ)(3) 投票方法 第一回投票で二名の候補の氏名まで書くことができる(旧・一名か二名をその都度決めて投票)

出席 北村理事長、君和田、小林の両副理事長、岩崎専務理事、滝鼻、島田、住田、門田、天野、野中、恒川、小山、永橋、江頭、又江原、岡元、上田、千葉、村上、玉川、佐藤の各理事。高野、田中、辻塚の各監事。

△理事交代▽

西日本新聞社

(新) 野中 大蔵 東京支社長

(旧) 梶 浩

テレビ東京

(新) 上田 克己 常務取締役

(旧) 田村 哲夫

書いた話 書かなかった話

夏の甲子園 取手二VS PL

名勝負を生んだ「木内マジック」

西田 善夫

これは「しゃべれなかった話」である。

監督として甲子園夏春優勝の木内幸男さん（現常総学院・七十一歳）が先日、今夏の大会を最後に監督勇退の意思表示をした。

昭和五十九年（一九八四）夏甲子園、茨城県立取手二高は初めて決勝に進出した。相手は前年度優勝のPL学園。主力の桑田、清原はまだ二年生、取手は全員三年生。「二年生に負けてたまるか」の思いとPL有利のムードにプレッシャーはつづいた。

木内監督は前夜のミーティングで「甲子園の決勝と県大会の決勝

は天と地の違いがある」と話し始めた。甲子園に来たからこそ、毎晩の食卓にトンカツとステーキがある。県大会は五百円の駅弁だった。選手は天と地の違いを納得する。監督の話は続く。

「今日こうして甲子園で試合ができるのも、県大会の決勝で竜ヶ崎一高に勝ったおかげだ」。選手は「甲子園の決勝が地とは言わないまでも、天下分け目の一戦は県大会で済んだのだ」と思うようになってきた。監督は「旗も二本あるそうだから、取手に帰っても格好がつく。だから明日は気楽にやれ」と結んだ。

決勝の勝敗は別にして、取手に帰ればバレードはある。たとえ旗は小さい準優勝旗でも、主将が手にする旗があれば格好がつく……この話を聞いて全員が全員、眠れたとは思

わないが、この八方破れの論法は大きな救いになったに違いない。翌朝、テレビ担当の私は早めに球場入りした。向こうから手押し車を押した取手の関係者が来た。

「おはようございます」と声を掛けて、何気なく「昨日の晩、選手どうでした」と私が聞いた。手押し車が近づいてきた。そして前記の話が聞けた。「いい話を聞きました。おかげで私も眠れました」。取手二高は選手どころか先生までよく眠ってしまったのだ。いい話だと思った。選手の緊張をほぐす。木内さんならではの話だ。しかし、すぐ間違いに気がついた。

旗が二本あるのはセンバツだけで、夏は優勝旗は一本しかない！ 普段は七分間のシートノックしかない試合前の練習も、決勝戦は四十五分の打撃練習ができる。その時間に取材陣が監督を囲む。旗の話を持ち出せば木内さんの人柄がにじむ談話は聞ける。だが紙面に「二本あるから気楽にやれ」「負けても旗がもらえるぞ」と載ると、勝敗によっては「そんなことも知らなかったのか」と監督批判につながる懸念もある。私さえ黙っていればと、話題にしなかった。

取手の打撃練習が終わり、取材陣全員が三塁側のPLへ移動した。残ったのは私一人。一塁側のダッグアウトの奥にある洗面台の前で木内監督を待った。

来た……監督は顔を洗った。腰のポケットからふっくらしたタオルを出して顔をふこうとした。周りにだれもない。今だ！「きのうミーティングで……と切り出そうとしたが、自分で「待った」を



球児の「熱い夏」を実況した放送席で 左は篠原一豊
元本田技研監督

かけた。ミーティングは外に漏れたくない。「だから聞いた」となると手押し車の先生に迷惑がかかる。話がこんがらかるのを避けたかった。私は言った。

「木内さん、夏は旗一本しかありませんよ」。驚いた監督は思わず「そんなことねえべさ」と茨城弁が出た。「今から何年前か前、小山高校が決勝で大負けしたけど、デッケエ旗持って帰って来たぞ」

と言いつ張る。八年も前、栃木の小山高校は決勝で広島崇徳高校に五対〇で敗れた。私は実況したので覚えていた。

「木内さん、あれ夏でしたっけ?」。しばらく沈黙があった。「うんだ、春だ、あれはセンバツだ」。分かってくれたことはありがたいが何とものがっかりしている。

木内さんが聞いた。「じゃ西田さん、夏は負けたら何くれんのかい?」「盾ですよ」「盾かい、デツカイケ……」。

人間の心理は面白い。大きな盾という木内さんが安心してしまふ心配があった。「こんなもんですよ」と小さめに手で形を作ると、「そんなんじや取手に帰っても格好つかねえな」と言う。「俺は春と夏と勘違いしていたんだな」ともつぶやく。もう顔はふいていた。

監督は急に振り向いて選手の斜め後方から声を掛けた。「おーい、旗は一本きやないんだと」。選手は一斉に振り

返った。あいつが何か言ったに違いないと目は私に、それも冷たく集まる。救ってくれるつもりだろう監督は「今、NHKさんに聞いたんだけど、夏は一本きやねえんだと」。

この一言で私は容疑者から真犯人に変わってしまった。

選手が聞いた。「負けたら何もええらんだろう」。監督は答えた。「盾だ」と」。

選手は父親がマジヤンかゴルフでもらってくる小さな盾しか浮かばない。だれかがつぶやいた。「きのう二本あるって言ったよなあ」。木内さんに聞こえた。「言った。俺は言ったぞ」。

しかられるかと静かになったベンチに監督の声が響いた。「二本あるのは春なんだと。しゃあなかんべ、今は夏なんだから……」。そして続けた。「おい、旗一本きやないんじや、お前たちは勝つっきやないな」。

選手がどつと笑った。甲子園で試合前にあんな大きな声で笑った

チームは見たことがない。なぜか私は目頭が熱くなった。

優勝を目前にした取手は九回裏にPLに追いつかれた。あと一回守れば優勝だったのに……。頭を下げてベンチに戻る選手に木内さんは声を掛けた。「お前ら、まだ甲子園でやれんだから良かったじやないか?」「甲子園で野球をやる」という目標は同点でも揺らかなかった。

延長十回表、五番中島のスリーランホームランで取手はリード、その裏を守りきって初優勝した。夏の大会で桑田と清原がいたPL学園が敗れたのは、三年間でこの試合だけだった。

旗の話は伝えずじまいだった。実況で語るには中身があまりすぎた。

にしだ・よしお会員 一九三六年生まれ
五八年NHK入局 スポーツ放送一筋に
歩む 九一年スポーツアナでは初めて解
説委員を兼務 九六年定年退職 W杯決
勝戦会場の横浜国際競技場場長を〇二年
秋まで務めた 現在 (有) オフィス・
ゼン代表取締役

書いた話

書かなかった話

ワーキング
プレス

「異能人」の進駐九カ月

▼柳川 正志

(共同通信経済部)

昨年九月末の内閣改造で、竹中平蔵経財相が金融相を兼任してからはや九カ月。騒動は「異能の人」の登場と同時に始まった。

就任直後、竹中氏は自身のブレンと目されてきた木村剛KPMGフィナンシャル社長ら民間人五人を含めた「金融分野緊急対応戦略プロジェクトチーム」を立ち上げる。これにより、事務方が一切を取り仕切り、審議会と大臣が追認してきた政策立案・運用の主導権喪失は、おそらく占領軍の進駐以来の珍事。これには栄光の大蔵省の後裔たちも動揺した。

困惑は報道陣へ伝播する。

まず、官僚の口が一斉に閉ざされた。落とすところのシナリオが描けない、うえ、「大臣サイドが情報漏えいに目を光らせている」と、情報管理が厳しくなった。このため、通常なら事前の根回し段階で情報が流れる与党の金融関係議員も蚊帳の外。当事者となる銀行サイドでも「役所からシャットアウトをくらっている」と悲鳴が上がった。

仕方なく、報道各社は目の色を変え、民間のPTメンバーに矛先を向けるが、中心人物らは記者を黙殺。もちろん夜回りも「お断り」。一方で、竹中氏の「舌禍」が株安に拍車を掛ける。曰く、大手行について「トゥー・ビッグ・トゥー・フェイル」という考え方は採らない」等々。竹中氏はその都度、記者会見や広報担当者を通じ「報道は真意ではない」と否定した。

「ならば真意は何か？」とばかりに、情報不足が続く中、金融庁記者が竹中氏のオフレコ懇談での発言内容を記事化し始めると、ムードは険悪化。「旧知の内閣府記者とはリラククスした様子で話す、金融庁記者の前では表情が硬く、口も固い」という冷戦状態に陥る場面もあった。

週末には頻繁にテレビ出演。「舌禍」問題で懲りた分、「事前にQ&Aがコントロールでき、得意のトクが生かせる」(大臣筋)テレビが多用された。疲労が重なった記者連は「土、日もつぶれるのか」とウンザリ顔で対応に追われた。

前任の柳沢伯夫大臣時代は、各社同席で、週二回程度の夜回りが定着。与党のベテラン政治家らしく、記者対応のツボを押さえ、官邸や永田町の動向も交え諸政策の進捗状況が語られた。何より事務方と一体化し、方向性と着地点が確認できた。

かたや文字通り学者大臣の竹中氏は、米国流の企業行動、会計制度を強調。その原則と枠組みを、整備していく手順をもつぱら公開

の場で「講義」するスタイル。

新旧大臣は具象と抽象、または帰納と演繹という鮮明なコントラストを見せた。官僚と記者は当初、その急変に戸惑った。と同時に、官製シンクタンクの長ならマクロ経済学者の延長線上で務まっても、海千山千が跋扈する生身の金融界をバツサリ切れるのか」という疑念を竹中氏に覚えた。

経過はご案内の通り。銀行の資本、資産の適正さを問う「金融再生プログラム」がスタート。五月にはりそな銀行へ公的資本が注入されるなど、新政策が現実を動かし始めた。この間、自民党幹部など「抵抗勢力」が竹中バッシングを浴びせ、竹中氏はしばしば糾弾の矢面に立たされたが、これをすり抜け、新スキームの骨格部分は譲らなかつた。金融庁のある幹部は「普通の神経なら、もたない。彼は一種の異能の人だ」と舌を巻いた。

改革は道半ば。その成否はまだ評価できないが、この先も騒がしい日々が続くことだけは間違いない。やながわ・まさし 新聞社を経て一九九二年入社。九五年に大阪支社経済部から編集局経済部 現在金融庁キャップ

● 弥生の新年代

ワーキング
プレス

考古学報道にもインパクト

▼伊藤 和史
(毎日新聞学芸部)

一般紙がそろって考古学ネタを一面トップに持ってきた。こんなことは、発掘ねつ造問題の第一報の時以来ではなかったか。

国立歴史民俗博物館(歴博)が五月十九日、「弥生時代の開始年代の見直し」を発表した。本当ならば、通説より弥生時代が五〇〇年も早く始まっていたことになる。日本の国の成り立ちだけでなく、朝鮮半島や中国の古代史にも影響を与える大変な新説だ。

ひと昔前、つまりねつ造問題以前なら、かなりすんなり一面トップに推せただろう。だが、しかし、と一度考えてみるのがあの問題の教訓だった。「発表が正しい

とすれば」という前提を紙面上で評価・表現したらよいか。

学問は仮説によって進歩するのだから、通説に重大な変更を迫る仮説が出た以上、大きく報道すべきだという考え方が一つある。逆に、検証不十分を理由に慎重に扱う立場にも一理あるだろう。

ねつ造問題でも、実は同じ点をめぐって過去の報道姿勢が厳しく問われた。「×十数年前の旧石器が出土」という一方の発表をうのみにし、否定的コメントを軽視し、速報にばかり走ってフォローをおろそかにする——といった報道がねつ造を助長したと批判された。いま求められるのはその逆。多くの見方を紙面化し、断定調は避け、入念にフォローする……。

今回の発表では、発表日が公表されてから実際の紙面化までに数

日の余裕があった。話が大きすぎただけに、大阪本社が考古学担当記者に連絡を取りながら、多くの研究者に話を聞いてみた。積極的な肯定派は少なく、慎重論や反対論がほとんどだった。「歴博の新説

が決まり、という印象を世間と与えないようにしてほしい」という注文ももらった。だから「慎重に小さめの扱いにしよう」と考えたかという事実はその逆で、「やはりこの話は大きい」との印象が取材を重ねるにつれて強まった。「信じがたい」「大陸と列島の年代が全く合わなくなる」などと、慎重・反対論の表現はまちまちにし、研究者が一樣に相当の衝撃を受けている様子が伝わってきたからだ。

そこで出稿も最初の予定より質量とも増やした。一面二番手という声もあったが、結局トップに落ち着いた。

そう判断できた理由の一つには、新説が自然科学的な年代測定を根拠としていたこともある。科学であれば追試、再現が可能ではないか。ある解釈をめぐって議論が続く、結論がうやむやになりか

ねない問題とは性質が違う。追試さえ進めば比較的早い時期に歴博説の当否が明らかになるだろう。また、明らかにしてもらわなければいけない。そのためにも、衝撃を受けた研究者には賛否どちらであれ自分の手で積極的に追試をやっつけてほしい。原稿ではその点を特に強調することにした。検証作業をきちんと報道すれば、一報だけ大きくて、話が確かなものになるほど関心が薄れるというマスコミ批判にこたえることにもなる。

実際、「弥生の新年代」報道は始まったばかりだと思ふ。ねつ造問題の教訓が本当に生きるかどうかの点も、むしろ今後問われる。第一報の大きさに見合うフォローが必要だろう。もっとも、そういった「正論」に突き動かされて、日々の取材が行なわれると見られるのも困る。自然科学的な年代測定は日本の考古学がこれまで敬遠しがちな分野だった。この新説の今後の扱われ方がとても興味深いから、フォローするのである。

いとう・かずし 一九八三年入社 中部本社報道部 東京本社地方部などを経て、二〇〇〇年から同学芸部

「Xデー」に備える百万都市

▼鹿又 久孝

(河北新報報道部)

五月二十六日午後六時二十四分、岩手、宮城両県をマグニチュード(M)7.0の三陸南地震が襲った。最大震度は「6弱」。仙台市内はほとんどが「4」だったが、それでも「ユサユサ」という激しい横揺れの最中は、恥ずかしながら身の危険を感じていた。

その仙台は近い将来、さらに規模の大きな地震に直撃されるといわれている。専門家は「今回に比べけた違いに揺れが大きい」と警告する。三陸南地震による死者はゼロだったが、想定される大地震

仙台発

宮城県沖地震

では犠牲者の発生も予測されている。「Xデー」をどう乗り切るか。行政も報道機関も、憂うつなテーマを突きつけられている。

政府の地震調査委員会は六月十日、二〇〇一年に続き、想定される宮城県沖地震の発生確率を発表した。二十年以内に発生する確率は88%（前回81%）、三十年以内だと99%（98%）に達する。数字の上から見ると二、三十年以内には間違いなく大地震が襲来するということになる。

仙台市は昨年、この発生確率などを参考に宮城県沖地震の被害想定をまとめた。予想されるマグニチュードは7.5から8.0で、市内の震度は5強から6強。死者数は十六―八十七人に上り、長期避難者は四万二千―九万五千人に達するという。被害想定については宮城県

も現在、最新版のとりまとめを進めており、深刻な被害予測が間もなく明らかになる見通しだ。

大地震は住民にとって「悪夢」以外の何ものでもないが、仙台市民はこれまで、ともすれば次の宮城県沖地震に無とん着だった。その市民も、三陸南地震による「ショック療法」で目覚めたのか、市内では家具転倒防止器具や防災グッズが飛ぶように売れ、市消防局などが開く防災講演会は市民でいっぱいになっている。

報道機関も尻をたたかれた思いだ。今年は一九七八年に起きた宮城県沖地震から二十五年の節目に当たることから、河北新報は三陸南地震の前日の五月二十五日付朝刊で、連載企画「備える―宮城県沖地震から25年」を始めたばかりだった。

事前に防災上の問題点をいくつかが拾い上げて準備したつもりだったが、携帯電話をはじめとする通信網のせい弱さや地滑りの恐ろしさなどは、三陸南地震を経験しなければ、深刻に受けとめなかったかもしれない。やはり「実践」こ

そが、最大の学習の場だった。

やや乱暴な例えだが、仙台市民は「必ず車に追突する」と分かっているバスの乗客と同じようなものかもしれない。五月二十六日に「追突」したときに比べバスのスピードは上がっており、何も手だてを講じなければ、市民の生命、財産は著しい損害を被ることになるだろう。

だが、悲観するのは早い。バスの乗客がシートベルトを締めて自分の身を守るのと同じように、家屋の耐震性を高めたり、家具の転倒防止策を講じたりすれば、被害は確実に軽減できる。「Xデー」に近い。急いで地震対策を。こう訴え続けるのが地元紙の使命だ。

(かのまた・ひさたか)

仙台市メモ

人口 101万5,253人
世帯 42万9,814世帯
面積 7万8,809ヘクタール
市長 5年(1600年)に伊達政宗が下
居城を定めて以来、全国有数の城下
町として栄えた。明治22年に指定
施行され、東北初の政令市として
移行した。サッカーJリーグのワ
ールドカップではイタリア代表の
メンバーとなり、トッティやデル
ピエロらに市民が熱狂した。牛たん
や中華、回転寿司の発祥地。

昭和基地
便り

③

南極の昭和基地は、五月末から日の昇らない「極夜」を迎えた。朝食が始まる午前八時、まだ外は暗闇で星が見える。ヘッド

ランプなしで歩くことはできない。ブリザードで積もった雪が寒さのために硬くしまり、強い風で削られて段差ができているため注意しないとつまずいてしまう。

起きるときは、広さ三畳ほどの個室の明かりのスイッチを手探りで捜して入れる。朝を迎えたというより夜中に蛍光灯の明かりで起こされたという感じに近い。決してさわやかではない。外は正午をはさんで一時間くらい、新聞が読めるほど明るくなるにすぎない。おのずと生活も不規則になりがちで、なかには昼間眠く、夜眠れなくなる人もいる。

いまでは食べるものも野菜や卵など生鮮食料品はなくなり、冷蔵庫はビールと飲み物だけに

● 極夜 食卓に最後のキャベツ ●

なった。

五月二十九日、最後のキャベツが食卓に並んだ。調理担当の土屋信隊長はそれをどうやって食べたか全員に聞いた。希望の多かったサラダやホイコーロ、それに野菜炒めや浅漬けにして振る舞った。その日は十五分ほどで皿に盛りられた料理はすべてなくなり、上屋さんのところにお代わりはないですか、と聞いてくる人までいた。

キャベツ……年末までは、あの心地よい菌ごたえと香りを味わうことはできない。そういえば去年の十二月、第一便のヘリコプターが食料を積んで昭和基地に到着したとき、前隊員たちが満面笑みを浮かべてヘリコプターに駆け寄ってきて、キャベツや果物の段ボール箱を抱えて運んでいったことを思い出した。その中には第一便の歓迎行事の一環で氷点下の中、ふんどし姿で太鼓を打っていた隊員もいた。その日の夕食はキャベツの千切りだった。

一方で、体重の増加に悩む隊員も少なくない。先日調査では、七〇%以上の隊員が日本にいたと

きより体重が増えていた。基地では氷点下三〇度を下回る寒さの中の観測や作業もあるため、食事に肉や魚などタンパク質や脂肪は欠かせないし、食べる量も多くなる。しかし、「極夜」に入ると、野外での活動や作業は危険も伴うため、どうしても時間が短くなる。運動量も減って、おのずと体重の増加につながるというわけである。

基地では水耕栽培による野菜が作られている。出荷は月に二回。一度に一人あたり五枚ほどサンチュエなどの葉が皿にのる。その水耕栽培器のすぐ隣では、毎晩隊員たちが自転車をこいでいる。体力づくりはもちろんだが、ダイエットに励んでいるのだ。昭和基地の宮田敬博医師は、南極・極夜での生活を「偏食との闘い」の日々という。極夜が終わるのは七月十三日。はじめての太陽にみな感激して、手を合わせる人もいるという。太陽が待ち遠しいこの頃である。

NHK社会部 藤田浩之

*第44次観測隊とともに越冬し、取材、放送にあたってはNHK隊からのお便りを随時掲載します。

◇将棋の会◇六月二十八日(土)

男女両プロから手ほどきを受け指導対局に十二人が挑み、四勝をあげました。安原幸雄さん(読売OB)は、今年四月に昇段したばかりの安食総子女流初段と平手で対局し、一昨年に続き、接戦を制しました。他の勝者は以下の通りです(敬称略)。

対大野八一雄六段・飛車落ち 林茂雄(中日OB) 飛車香落ち 白木東洋(毎日OB)
対安食プロ・角落ち 池上雅己(云友)

寄贈書

平成十四年度 日本新聞協会の活動 日本新聞協会
日本ABC協会 五十年史 日本ABC協会

ごわす 新井正義さんの思い出
回想録刊行発起人 酒井新二
映像の先駆者 125人の肖像 渡辺みどり
会員の著書(ご寄贈いただきました)

死亡記事を読む 諸岡達一
通訳の英語 日本語 小松達也

◇個人D会員

プロフィール

六月一日付入会の個人D会員、法人・個人賛助
会員の方々です。

▼会員証が古くなられた方、写真を新しく
されたい方は顔写真(縦3cm×横2.5cm)
を事務局の本庄までおもちいただければ、
すぐ再発行いたします。

写真 小倉 健史

（2000年時事通信入社 02年釜山アジア大会）
などを取材 3月から名古屋支社



熱帯魚を餌でおびき寄せ捕まえ（左）、食べている（右）ところが世界で初めて確認された＝犬山市日本モンキーセンター

サル百態

「あらかわいい。何、これ？」

「サルだって」

「え、うそ。コアラでしょう」

「いや、耳の白い毛なんかコアラそっくりだけど、横顔はどう見ても違うよね。コモンマーモセットという南米のサルなのよ」

「魚食べてるね。それどうしたの？」

「いや、ホントは写真に写ってないところがすごいよ。このサル、世界で初めて餌を使って漁をするんだって」

そこに我が家の物知り小学生登場。

「知ってるよ。食パンを水に落として、

周りに魚が集まってきたらさっと捕まえて食べるの。そのパンもちゃんと水から上げて食べちゃう。頭いいよ」

「文字や数字が分かる天才チンパンジーもいるしね。もうサル知恵なんて言えないね」

「ホットケーキを焼くサルもいるんだよ。

食べ終わったらニヤッと笑うの」

「よく知ってるねえ。誰に聞いたの？」

「テレビ。『ポチたま』（テレビ東京）大好きなの」

「昔『猿の惑星』っていう人間より頭のいいサルのSF映画があったけど……」

「もうSFじゃないよ」

ああ、なんだかぞっとしてきちゃった。

（松本侑壬子）

